



TITLE:

価値の類型と個性(二)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 価値の類型と個性(二). 経済論叢 1923, 16(5): 770-787

ISSUE DATE:

1923-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128027>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 六 卷 第 五 號

大正二十二年一月一日發行

論 叢

相續税の經濟政策觀

法學博士 神戸 正雄

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

價値の類型と個性

法學士 恒 藤 恭

サン・シ
モン派の社會改造哲學及び連帶思想

文學博士 米田庄太郎

本邦自殺の男女別

法學博士 財部 靜治

時 論

税法の新改正を論ず

法學博士 小川郷太郎

發明と國力

法學博士 山本美越乃

說 苑

水戸烈公の穀物政策

法學士 本庄榮治郎

中世末期に於ける村落の結合を論ず

牧野信之助

雜 錄

炭鑛労働者の生計

法學博士 河田 嗣郎

簡易平均法に就いて

經濟學士 岡崎 文規

價値の類型と個性(二)

恒 藤 恭

七

理性の能力に對する、牢固として動かすべからざる信念が、ソクラテス、プラトーン及びカントを通じて、哲學的思惟の全根柢を形成してゐるのを見る。これらの人々の哲學の體系の構成原理の一として、重要な役割をつとめてゐる、合理論的價値觀も、さうした信念の發動の一方面を成すものに他ならぬ。

理論的認識の立場から、眞理の把握を志す限り、哲學は、理性の能力に對し、信賴を託せざるを得ないわけであるが、プラトーンとカントとの兩者を比較して見るときは、各者が、哲學的思惟に關して、理性の能力に對し、信賴を託する意味が、著しく異なることを、——從つて、合理論的思惟傾向が、各者の價値觀を制約してゐる關係も亦著しく相違することを、知るであらう。

プラトーンによれば、理論的眞理は、超越的實在としてのイデアのすがたが、われ／＼の意識の裡に寫し取られる處に、成立するのであるが、この事たる、感覺的認識の爲し得る所ではなく、

概念的認識を俟つてのみ、可能とされる所である。すなはち、概念的認識の能力としての理性は轉變定まりなき現象の世界を超越して存立するところの、永劫絶對のイデアの世界の傍を、われわれに傳へるものであるが、理性が斯かるすぐれたる力を有するのは、偏へに、それが概念に依る認識作用をいとなむことに基くのである。蓋しさまざまのイデアは、現象の世界にあらはれては消える一切の個物の原型たる意義を有するものであり、感覺を通じて認識されるところの、現象の世界の事物の雜多なるに對して、純粹なる普遍的内容を保有しつつ、存立するものたる以上、事物について普遍的知識をあたへる概念のみが、イデアの形相を、捕捉し得るものと、言はねばならぬからである。

斯くプラトーンにおいては、超越的實在の真相を傳へるといふ、卓越せる能力を、理性が有するものと、考へられてゐるが、その代りに、理性は、ひたすらにイデアのすがたを模寫することによつてのみ、眞理を獲得し能ふのであり、謂はゞ、實在の提示する所に、唯々として従ふことを、要求されるのである。かくて、理論的價值は、必然に普遍的内容を具有せざるべからざる關係に立つものであり、それに伴うて、道德的價值も亦、同じ構造をもたなければならぬといふのが、プラトーンの根本見解たることは、前に述べた如くである。つまり、プラトーンの考へによれば、人間が、普遍妥當的——即ち客觀的價值を實現し得るのは、人間に固有する理性の能力に

1) 國家論などに現れたプラトーンの價値觀については、姑く考察を向けないこととする——前號、拙稿、31-32頁參照。

基くのであるが、理性を導いて斯かる機能を營み得させる所のもの、言ひかへると、價値の客觀性の根源たる所のものは、超越的實在としてのイデアたるのであり、イデアは、その普遍的內容性において同時に眞正の實在たり、眞正の價値たるのである。

プラトーンが理性にみよめた絶大なる能力を限定すると同時に、プラトーンによつて置かれた實在に對する依存關係から、理性を解放して、獨立の地位に立たせたといふのが、カントの先驗的觀念論の旨趣である。カントの見解に従へば、理性は、到底經驗を超越する實在を認識すべくもないが、しかも、その能力の及ぶ範圍たる現象の世界については、決して自己以外のもの、例へば超越的實在によつて制約されることなく、全く自己固有の法則に基いて、眞理を認識し能ふのである。かくの如く、理性の能力に關して、カントは、プラトーンとは、著しく相違せる見解を持するものであるけれど、普遍的概念による認識の意義を、重く視る點においては、プラトーンと傾向を同じくするものである。殊に、カントが、理論理性の能力を批判するに當り、その所産として着眼したのが、普遍化的概念構成を旨とする數學的自然科學であつたといふ事情が、一層彼をして、さうした傾向に偏らしめたのであつた。

先驗的觀念論は、理論的價値の客觀性の根據を、經驗の構成に参加する理性の先天的形式に、求めるものであつて、經驗をアプリアリとアポステリアリとに分解することは、言ふまでもなく

先驗的方法の第一義たるものである。そして理論的價値の客觀性は、アプリアリの普遍妥當性に基くものに他ならぬとされるのであるが、カントは、一切の經驗の構成に對して普遍的に妥當することを本質とするところの、アプリアリは、必然に普遍的概念たらねばならぬと思惟し、それに伴うて、客觀的認識は、普遍的概念たるアプリアリの下に、特殊の表象たるアポステリオリを包攝することにより、成立するものと、考へた。かくて、カントは理論的價値の内容は、必然に普遍的たるべきものと、思惟し、更に、道德的、法律的、美的價値などについても、同一の仕方、先驗的方法を應用し、同じやうな合理的價値觀を、構成したのであつた。要するに、カントは、プラトーンとは違つて、價値の客觀性の根源を、理性その者に求めてゐるものゝ、理論理性の先天的形式を以て、普遍的概念構成の原理としての普遍的概念たるものと、考へたところからおのづと、すべての客觀的價値は、普遍的内容を有すると、思惟するに至つたのである。

實在と理性との關係について、プラトーンとカントとは、正反對の意見をいだくものであるけれど、理性の合法則的な活動の特色を、最もよく發揮するものとも、視えられるであらう所の概念的思惟を、重んずる點においては、両者がその軌を一にするものであるといふことは、右に述べた所である。

プラトーン自身の立場からすれば、概念は實在の形相を模寫するものであるけれど——彼の思

想を批判せんとする者の立場からすれば、プラトーンにおいては、實在は概念の實體化されたものに他ならず、實在が合理的普遍的内容を有すると、考へられるのは、斯かる關係に基くものである。そして、プラトーンが、官能的知覺に映じる對象を以て、十分なる意味における實在性¹⁾を有たぬものと、思惟したのも、それらの對象が、概念によつて模寫され能はぬところの、非合理的個性的内容を提示するからである。更に、實在との關係において、概念の有する威力は、やがて亦、價値との關係においても、眞に尊重と推獎とを値ひする所のものゝ内容、すなはち客觀的價値の内容は、合理的普遍的たらねばならぬと、思惟された次第である。

カントにあつては、理性が概念によつて認識し得るのは、プラトーンの意味における超越的實在ではなく、内在的實在、すなはち可能的經驗の一切の對象の總體としての自然の世界である。この世界は、プラトーンのイデアの世界におけるやうに、完全に理性的認識によつて、洞見され能ふものではないにせよ、原理的には、概念によつて測定され能ふものと、思惟されて居るのである。すなはち、この世界の頂部には、最も普遍的なる自然その者の概念が立ち、中間層には、相對的に普遍的なる自然法則の概念が立ち、底部には、特殊なる自然的事象の概念が立つのであつて、この世界の盡きる處には、概念的認識の支配の全く及びえない、純粹なる感性的内容の世界が、ひろがつてゐる、といひえられるわけである。實在との關係においての、かうしたカント

1) cf. Lask, Fichtes Idealismus und die Geschichte, S. 32.

の普遍的概念偏重の傾向は、さきに述べたやうに、價値の世界の構造をも亦、一樣に、普遍的なる内容の積層として、理會しやうとする態度となつてあらはれたのであり、抽象的なる内容を有する法則的概念の頂點から、合理的思惟の眼光を放つとき、その視野のうちに瞭然と收めえられる限りにおいてのみ、價値の世界は成立すると、カントは確信したのである

八

以上に考察し來つた如く、ソクラテス、プラトーン及びカントの三者を通じて、實在の世界の論理的構造と、價値の世界のそれとは、互ひに相照應するものと思惟せられ、且つかれらに共通なる合理主義的精神が、斯かる關係の規定を要求したのであつた。カント以後の獨逸觀念論の諸體系において、殊にフイヒテ及びヘーゲルの思辨において、この問題が如何に取扱はれたかといふ點は、茲では考察の中心の外に置くことゝして、現代の哲學において、實在の世界の論理的構造に關する合理主義的見解に對し、修正が加へられたのに並行して、價値の世界に關する合理主義的見解も亦、修正を加へられるべき形勢となつてゐる點を、リッカート並びにラスクの學說を索縁として學示したいと思ふ。

カントは、雜多なる個性的内容の單なる集積を意味するところの、知覺の世界の上方に、普遍的法則によつて支配される限りにおいての、物の存在を意味するところの、自然の世界を置いた

が、リツカートは、カントの意味における知覺の世界と、經驗科學的認識の所産としての世界との中間に、所與の世界及び客觀的實在の世界を想定すると共に、その上方に、自然の世界と並んで、歴史の世界又は文化の世界の存立すべき地盤のあたへられてゐることを、論證した。¹⁾

いさゝかも思惟の規定に服しない、純粹なる體驗の世界については、其論理的構造を問題とすることは、意味を成さぬであらう。言ひ換へると、それについて、論理的構造が問題とされるころの世界は、すでに何等かの程度において、思惟によつて規定された對象の世界と、思惟されなければならぬ。斯かる見地からすれば、カントにあつては、實在的存在の世界として、認められてゐるものは、自然の世界に限られて居るのであり、従つて、カントは、實在の世界を以て論理的には、普遍的内容の合法則的關聯を意味するものとして、思惟したと、言ひえられるわけである。しかるに、斯かる實在の構造の合理主義的理會は、リツカートにより、二重の意味において重要な修正を施された。第一に、リツカートのいはゆる所與の世界及び客觀的實在の世界は、それと、彼のいはゆる所與性の範疇又は構成的範疇によつて、論理的規定を加へられた世界であり、その意味において、『實在する』對象の世界たるものと、視られ能ふのであるが、しかも、これらの世界を充すところの對象は、未だ何等の論理的加工をも受けない、非合理的個性的内容を具有するものであり、恰もその點を以て、經驗科學の世界から區別されるのである。次にリツカ

1) Rickelt, Der Gegenstand der Erkenntnis, 4-5. A., 1921, S. 336 ff., 352 ff.

トトの意味における自然科学の世界の概念は、カントによつて確立された論理的意義における『自然』の概念と、大體において、一致するものであるが、²⁾ リツカートは、普遍的法則の支配を受けず、しかも、客觀的實在の對象において見られるやうな個性的内容を有つものでもないところの、歴史の世界を、自然の世界と、並存せしめてゐる。この歴史の世界は、客觀的實在に比して、より精密なる論理的規定を加へられた世界ではあるものゝ、法則的認識としての自然科学的認識にとりては、踰えることの能きない限界の彼方に立つところの、個性的内容をなへる對象の世界たるのである。

謂はゆるカントのコーペルニカスの偉業は、實在の論理的構造を理會せむとする者の、必ずたどり行かねばならぬ途を、切り拓いたものであるけれど、經驗科學者のところの、經驗的實在論の立場を、いたはり顧みるといふことについては、多少遺憾なきを得ないと、いふべきであらう。リツカートの學説は、この點を十分に考慮して立てられたものであり、自然科学的認識及び歴史科學的認識は、いづれも、客觀的實在の存立を前提し、これに向つて思惟の勞作を加へるものであるといふ説明は、超越的實在論者の模寫説を打破しつつも、なほ能く經驗的實在論者に對して、満足をあたへむことを、期するものである。³⁾ として、これらの二様の認識の差違は、自然科学的認識が、ひたすらに客觀的實在の諸對象に普遍的なる所のものに着眼し、以て普遍的概念

2) 客觀的實在の概念を定立した限りに於いて、リツカートの「自然」の概念は、カントの其れと一致しない方面をもつてゐる點は、茲には特に問題としない。
3) Rickelt, *ibid.* S. 313 ff.

の合法的體系を建設することを、念とするに反して、歴史科學的認識は、客觀的實在の諸對象において個性的なる所のものに着眼し、これを普遍的文化價値に關係せしめることにより、その中から、本質的なる内容を選出し、以て一層高次なる意味において個性的なる對象の世界を構成する點にあると、考へられるのである。

かうしたリッカートの思想が、その儘受け容れらるべきものであるか否かといふ點は、別問題として、茲に問題としてゐる事柄に關聯して考へるときは、次の二つの點に、注意せざるを得ない。——十分なる意味において、實在すると、言ひ得られるところの世界は、プラトーンにおいては、經驗を超越して存立するイデアの世界であつたのを、カントは、經驗の限界の此方に移し置いたが、カントにおいても、プラトーンにおけるとひとしく、實在の世界は、普遍的内容を有する限りにおいて、且つその故にこそ、實在の世界として妥當するものと、思惟された。しかるに、リッカートは、カントと同様に、實在の世界が、實在の世界として妥當し得る所以を、理性の要求に遵つて構成される點に求めながらも、この要求は、必ずしも實在の世界が、普遍的内容を有する對象の世界として構成されることに、存しないこと、言ひ換へると、個性的内容を有する對象の世界として、實在の世界を構成することが、理性の要求をみたしつゝ、爲し遂げえられるものたることを、明かにした。——次に、リッカートは、斯かる個性的實在構成原理の中の歴史

的實在構成原理と、普遍的文化價值との間に、緊密なる關係が、存在するものであること、すなはち、歴史の世界の構成分子たるべき對象は、普遍的文化價值との關係においてのみ、それに特有なる個性的内容を、有するものであることを、明かにした。⁽⁴⁾

實在は、普遍的内容を有するものとしてのみ、客觀的存立を保つものでなく、個性的内容を有するものとしても、なほ能く客觀的存立を保ち得ること、殊に十分なる意味において個性的内容を有すると、言ひえられるところの、歴史的實在は、價値を顧慮する認識方法の所産たることが論證された場合において、常に、實在の世界と平行して、考察され來つたところの、價値の世界についても、その論理的構造に關する從來の合理論的見解に對し、修正を加へるべき必要の存することが、意識され、その企てが要求されることは、まことに當然の歸結であると、言はねばなるまい。そして、斯かる歸結を、明確に抽出したものとて、次には、ラスクの見解を、吟味しなければならぬ。

九

價値の論理的構造に關するラスクの見解の要領は、次の如く説きえられる。

價値と實在とを峻別する批判的二元論の立場から、論理的に價値の形態を考察するときは、價値は、一方には、價値一回性 (Wertindividualität) 又は價値個性 (Wertindividualität) として現れ

4) cf. Rickelt, ibid. S. 366 ff.; Die Grenzen der Naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 3-4 A., 1921, SS. 270-271.

他方には、價值共通性 (Wertgemeinschaft) 又は價值類型 (Werttypus) として現れる。價值共通性としては、價值は、理論的價值、倫理的價值、美的價值等の種別を有し、個々の實在内容の多數に歸屬することが能きる。ほとんどすべての哲學は、この價值共通性を、考察の對象とするものであつて、理論的、倫理的、美的等の價值が、上下の系列に組み立てられた王國、即ち理想的宇宙を、その系統的組織において闡明し、各個の價值の普遍妥當的意味様式を吟味することゝ、任務とするのである。しかしながら、價值類型が、價值の唯一の論理的形式でなければならぬと、主張するのは、單なる偏見に過ぎず、妥當の絶對性、價值の普遍妥當性が、何故に、普遍概念性の論理的構造に結合されねばならぬか、何故に、一回性及び不反覆性を具へ得ないかといふことは、到底理解しえられぬ所であり、價值の高貴性は、これらの二様の可能性によつて、毫も傷けられるものではなく、實に、價值は、價值個性として、一切の經驗的實在を超越する世界を意味することを、妨げないのである。價值一回性としては、價值は、その附着する地盤たる經驗的實在と同様に、唯一的、不反覆的たるものであるが、後者において見られるやうな、無限多様性は之を具有するものでない。——價值は、價值一回性の形態において、すでに、經驗的なもの、無限多様な内容の背後に退き立つものであるが、更に、價值類型の形態においては、經驗的なもの、具象的所與性から全く隔絶する。すなはち、價值類型は、數知れぬ個々の實現の

場合に對し、絶對的典範性を具へるものであり、そのために、價值一回性とはちがつて、價值様式の性質を有するのである。そして、價值一回性の形態における價值、すなはち純然たる分岐個性 (Gliederindividualitäten) によつて合成された一回的價值系列は、終極においては、理論的、倫理的、美的等の、個々の類型的價值意味に對し、何等かの目的論的關係に立たしめらるべきものであるにもせよ、これらの形式的價值に見られるやうな種別的被規定性 (spezifische Bestimmtheit) を超越して、その彼岸に存するものと、考へられなければならない。¹⁾

ラスクのいはゆる價值共通性又は價值類型は、從來の哲學において、普通に考へられてゐるところの、眞、善、美等の抽象的、普遍的價值を指すものであるが、彼のいはゆる價值一回性又は價值個性の何たるかにつきては、多少の解釋を要する。

ラスクは、價值一回性又は價值個性を以て、價值共通性又は價值類型とひとしく、經驗的實在を超越して高く懸るところの世界たるものと、思惟してゐるが、しかもその意味は、両者が、何等實在と交渉する所なく存立するといふのではなく、價值が、經驗的實在を舞臺又は地盤としてのみ、存在し能ふことは、勿論之を前提するものである。そして價值類型と價值個性との差異の一つは、各者が、經驗的又は原本的實在を地盤として現れる態様の相違に存するものと、考へられるのである。すなはち價值類型は、原本的實在のうちに反覆して實現され、個々の實在内容の

- 1) Lask, Rechtsphilosophie (Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts) 1925, SS. 3-4, -拙譯ラスク、法律哲學』5-8頁
- 2) ラスクは、リッカードの意味における客觀的實在に該当する所のものを、經驗的實在、原本的實在、認識論的實在等の名稱を以てよんでゐる。

多數に、共通に歸屬し得るものたるに反し、價値個性は、全然不反覆的であり、原本的實在を地盤として唯一度實現され得るものである。次に、價値類型は、普遍的抽象の内容を有し、隨つて價値様式たる意義を有するものたるに反し、價値個性は、個性的具象の内容を有し、相互に關聯して有機的全體を形成するものである。終りに、價値類型は、理論的、倫理的等の種別を有するに反し、價値個性については、種別を立てることを得ない。

ラスクは、實在の構造に關するリツカートの見解に、そのまゝ賛同するものではないけれど、客觀的實在の上方に、自然の世界及び歴史の世界を並立せしめるリツカートの考へ方は、之を採用して居り、さうした實在の構造との比論及び對照において、兩様の價値の世界の構造を想定し且つ説明してゐる。すなはち、價値共通性の世界は、自然の世界と類似した構造をもつものであり、價値一回性の世界は、客觀的又は經驗的實在の世界、並びに歴史の世界と類似した構造をもつものであると考へてゐる。價値個性の世界は、經驗的實在及び歴史の世界と同様に、不反覆性及び具象的内容性を有するものであるが、經驗的實在において見られるやうな、無限多樣性をもたない點においては、歴史的實在と、その趣を同じくするものである。けれども、價値一回性と歴史的事實性が、かやうに、その論理的構造において、互ひに著しく共通する點があるからといふので、兩者を同一視するのは、價値と實在とを隔てる所の深き罅隙を看過するものであつて

歴史の世界は、時間的、因果的、實在的關聯を提示するものたるに反し、價值一回性の世界については、時間的關聯は、全く問題とならず、その世界における關聯を成り立たしめる原理は、決して因果の範疇によつてあたへられるものではない。³⁾

十

ラスクは、合理主義的價值考察方法の根本的缺陷を指摘して曰く、歴史的现象は、その具象的形態において、抽象的價值様式の要求に如何程適合してゐるかといふことを、吟味されることにより、その意義を十分に評價され能ふものではない。すなはち、價值普遍性 (Wertallgemeinheit) と個々の價值の具象的實現狀態とを、批判的分析により區別した上、歴史の個體は、両者の實在的融合であるとして、説明すると共に、その獨自の意義を、抽象的價值の標準によつて考察するといふのであつては、到底不十分であるといはねばならぬ。歴史の個性のうちには、それ以上のものが含まれてゐるのであつて、特定の價值個體は、その個性のために、且つその不代替の一回性において、評價されるといふのでなければならぬ。カント風の合理主義的評價の方法を深るべきは、價值について本質的なものは、決して個性の相違には存しないで、必ずや他と全然共通するところの合理的要素に存することゝなる。この場合には、評價作用は、個性の核心にまで到達しないで、同一の評價範圍における無數の見本に共通たるべき一部分、一標徴を目して行はれ

3) cf. Lask. *ibid* SS. 9-12—邦譯, 17-23頁

るのであり、或る對象は、この共通なる分子のために、價値をみとめられるに止まつて、その個性的特性のために、價値ありとされるのではない。すなはち、其れは、價値ある個體とは視られるけれど、その個性において價値ある個體とは視られない。之に反して、個性的評價方法は、對象の一部分に着眼することなく、その全體に向ふべきであり、直接に與へられたるもの以外のものを指示する所の形式的要素に、注意を集中しないで、對象を全體として視、それを構成する一切の部分の共屬的關聯において、之を評價すべきである。だから、この評價方法においては、個體は、類の見本として、普遍的價値の單なる支持者として、あらはれず、その全個性において他の個體から區別されつゝ、獨自の意義をみとめられるのである。而して、或る對象をして、價値個性たらしめる所の、價値は、他の關係においては、同時に、或る程度の價値普遍性を有するといふやうに、相對的な個性を有するものではなく、この點において、價値個性は、抽象的價値の單なる支持者としての個體的價値から、嚴密に區別されるのである。かやうに、以上の兩様の評價方法は、相互に全く獨立の意義を有するものではあるけれど、恰もその故に、兩者は同一の對象に向つて、交互に適用され得るものであつて、一を以て他に代へることゝゆるさぬ特性と相互的補充性を、それら、具備するものがある。¹⁾

斯くの如く、抽象的及び具象的價値考察方法は、いづれも、他を俟つて初めて、價値の本質の

1) Lask. Fichtes Idealismus u. Geschichte, S. 10 ff.

正しき理會を、可能ならしめるものであるが、前者を偏重する思想傾向の缺陷と、後者の重要性とを、強く意識するの餘り、前者を排斥して、後者をのみ支持せむとする、別個の一面性に、陥つたものは、ヘーゲルの思辨である。實に形式と内容と、抽象的價值普遍性と具象的實在質料とを、峻しく對立せしめる所の、カントの合理主義的價值觀に對する、徹底的なる反抗の精神が、ヘーゲルの哲學の全體系にわたつて横溢してゐるのである。そして斯かる精神に動かされつゝ、あらゆる合理的なるものゝ裡に、實在的なものを觀、あらゆる實在的なものゝ裡に、合理的なるものを觀むとする、旺なる意圖を實現するために、ヘーゲルの案出したのは、辨證法的論理學、又はラスクのいはゆる發出的論理學である。

價値の普遍妥當性と普遍的内容性とを結合せしめるカントの見解に比すれば、普遍妥當的價值の具象的内容性を主張するヘーゲルの見解は、非合理主義的價值觀たるものとも、言ひえられるであらうけれど、個性的なる實在質料において、理性の合理的思惟能力の限界を觀取したカントの態度と對照するときは、斯かる限界を撤去して、理性の支配領域を、非合理的なるものゝ世界に擴大したヘーゲルの態度は、はるかに主知主義的、合理主義的であるといふべきである。プラトーンが、普遍的實在内容と普遍的價值内容との完全なる融合を、超越的なイデアの世界のうちに、望見するといふ、すぐれたる能力を、理性に對してみとめたのにもまさつて、現實的な

世界その者のうちに、具象的價値内容と具象的實在内容との統一的發展の形相を、認識するといふ、絶大なる能力を、理性のために主張するヘーゲルは、カントによつて確立された批判哲學の精神を無視することにより、カントの合理論的價値觀を征服せむとするものである。

獨逸理想主義の歴史において、カントとヘーゲルとの中間に立つフイヒテは、價値の論理の問題においても、両者の中間に立つものであり、カントの批判主義の精神を没却することなくしてカントの價値觀の一面性に打ち克つの途を、指し示すものである。²⁾ 理性のために、その主權の行はれる領域を確保すると共に、その支配の及び能はざる限界を劃した、カントのコペルニカス的業績を、正しき方向に繼承し發展することが、つねに哲學的思索において、ラスクの標語とする所であるが、價値の論理の問題に對し、斯かる念慮を以て臨むに當り、フイヒテの思想は、正にラスクの思索の出發點とされねばならなかつた。且つ歴史的認識方法に關するリツカートの研究が、ラスクに對し多くの暗示をあたへたことは、更めて言ふまでもなからう。³⁾

カントの價値觀の構成原理たる分析的論理の見地からいへば、論理的に最も低次なる地位にある所のものは、最も内容に富むものであり、言ひ換へると、直接に經驗される無數の個物に他ならぬ。この經驗的なものは、十分なる意味における實在性を有するものであり、概念は、思惟が個物の内容を分析し、その一部分たる普遍的標徴を抽出し結合して、構成した產物にすぎず

2) cf. Lask, *ibid.* SS. 18 ff., 195 ff., 228 ff.

3) cf. Lask, *ibid.* S. 11, Anm. 1.

個物をはなれて獨立の存在を有するものではない。——之に反して、ヘーゲルの價值觀の根柢たる發生的論理は、次のやうな見解をとるものである。概念の個物に對する論理的支配關係は、同時に、低次の實在たる個物に對して高次の實在の有する力を、示すものである。そして、概念は必然に經驗的實在に比して内容に富み、前者の内容は、後者の内容の一部分たるものではなく、反つて、後者の内容は、前者の本質の發出する所に、初めて成立するものである。言ひかへると、概念と個物との關係は、概念を構成する思惟の作用によつて、設定されるものではなく、特殊なるものが普遍的なるものに對して倚存する實在的關係を、意味するものである。⁴⁾

ヘーゲルの發出的論理は、われ／＼の思惟が、やゝもすれば誘ひ寄せられがちな、魅惑に富む深淵であるが、分析的論理によつて進み能ふべき道程を進むことに、十分努力することなくして一躍して、發出的論理の立場に就くことは、決して望ましいことではなからう。カントの批判的精神に徹底せむとする態度を格守するラスクが、カントの價值觀を支へる分析的論理を維持しつつ、カントの見解に修正を加へて、眞個性の思想を展開するの途を選んだのは、ヘーゲルの思索の成果を、ヘーゲルの論理より分離し、カントの論理の前進の目標として定立するものと、いふべきである。